

バカとテストと召喚獣
～文月の天才少女たち
～

白井雪乃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文月学園にやってきた4人の天才たち

明久達はその天才4人とどう過ごし

戦っていくのか！

目次

| | |
|--------------------|----|
| オリキャラ設定 | 1 |
| 第一話、天才達集まる | 10 |
| 第二話 新Aクラス! | 15 |
| 第三話 初対決! 白咲VS島田 | 21 |
| 第四話 急展開! 明久と初デート?? | 33 |
| 第五話 AクラスVSSSSクラス | |
| エキシビジョンマッチ!! | 41 |
| 第六話 秀才VS天才 | 47 |
| 第七話 忍&セーラ少女VS『死神』 | 57 |

オリキヤラ設定

オリキヤラ設定

しほみ

・白咲 雪 (♀)

・得意科目

現代国語、古典、数学、物理、化学、生物 800～900点台

地学、地理、現代社会、英語、保健体育 600～800点台

・苦手科目

日本史、世界史 400～600点台

総合科目 8000点台

・容姿、性格

身長147cmと身長はかなり低く本人も気にしている

髪型は黒髪のロング、青色の目をしているのが特徴

(と本人は言っている)

胸は霧島以上姫路未満とかなり大きく

島田美波にかなり目を付けられている

クラス分けの試験ではあまりに圧倒的 point 差があり

特別クラス【SSクラス】にクラス分けとなり

その首席となる

Aクラス首席の霧島翔子とは1年生の時から

仲良くなり以降勉強を教えたりしている

友達を大切にしている吉井明久に好意を抱いており

アタックをしようとするが緊張すると

噛み癖があり上手く伝えられないでいる

お菓子作りが得意だが、料理は普通

明久が上手すぎるせいで自信が無くなっている

(他にも書きたいのですが長くなりそうなので物語が進む事に書き加えます)

白咲「適當すぎません?！」

・召喚獣

雪模様の着物、装備は扇子

見た目では弱そうだがブーメラン見たく投げたり

姫路の大剣も防いだりもできる

腕輪の能力1「絶対零度」

50点消費で半径5mの範囲に入ってきた敵を敵感知をする事ができる

半径内に入った敵を10秒10点で削ることもできる

50点+10点で半径6mと

消費を増やす事に範囲も大きくなる

200点消費で最大半径20mまで伸ばせる

腕輪の能力2「氷の弾丸」
アイスマグナム

50点消費で氷の弾丸を創り

遠距離射撃ができる

50点で5発か

50点で巨大な弾1発か選べる

腕輪の能力3「???」

・鈴原 花音かのん (♀)

・得意科目

なし

・苦手科目

なし

全ての科目 600〜700点台

総合科目 7800点台

・容姿、性格

身長160cm、茶髪のセミロング

胸は霧島と同じくらい

白咲とは小学生からの幼馴染、明るく

誰とでも友達になれるが本人も

好き嫌いはある

『文武両道』がモットーで

小さい頃から合気道を習っており

現在では黒帯

テストも圧倒的な点数で【SSクラス】へ

・召喚獣

巫女装束、装備は薙刀

腕輪の能力1「花吹雪」

100点消費で自分、相手の周りに花吹雪が起きる

ダメージはないが相手の目くらまし

腕輪の能力2「枝切り」

100点消費で敵の背後に移動し

首を切る

自分より点数が低い相手だと

避けない限り一撃

・鈴原 詩音しおん（♀）

・得意科目

なし

・苦手科目

なし

全ての科目 600〜700点台

総合科目 7800点台

・容姿、性格

鈴原花音の双子の妹

身長160cm、茶髪のセミロング

メガネを掛けている

胸は霧島と同じくらい

姉とは違い静かな性格

武は極めていないが

家事などを極めている

料理は明久と同じレベル

白咲と姉と一緒に勉強をしております

二人と同じく「SSクラス」へ

・召喚獣

ナース服、装備はメス、注射

腕輪の能力1「治癒^{ヒール}」

100点消費で味方の召喚獣を回復させる

自分を回復は出来ない

腕輪の能力2「レントゲン」

20点消費で相手召喚獣の次の動きを

筋肉や呼吸の動きから予測する

腕輪の能力3 「ドリベシ身体強化」

50点消費で自分、味方の攻撃、速度を2倍にできる

一回目は50点、2回目は100点と

使う事に消費は大きくなる

・水野 大河 (♂)

・得意科目

保健体育 6000点台

・苦手科目

英語
現代国語、古典、数学、物理、化学、生物、地学、地理、日本史、世界史、現代社会、

100点台

総合科目 7000点台

・容姿、性格

身長175cm、白髪

保健体育のみで「SSクラス」にはいった天才

決して変態ではない

純粹に保健体育を学んでいる

白咲をいじるのが楽しみの一つ

土屋康太とはライバルであり

親友でもある

・召喚獣

白衣に棺桶を持っている。装備は拳銃

腕輪の能力1「追尾弾」

50点消費で拳銃にホーミング機能がつく

何かに当たらない限り追いかける

腕輪の能力2「死神の鎮魂歌」
レクイエム

元の点数の半分を消費して使う超加速技+超強化技

自分には相手が止まって見える。4秒間

相手を止めて一撃の攻撃を喰らわせられる

但しその後は5秒間動けなくなる

第一話、天才達集まる

明久視点

文月学園に入学して早くも1年、僕も遂に二年生だ！

クラス分けの試験は結構手応えがあったからAクラスは取れるはず

クラス分け試験前から霧島さんや姫路さん、雄二、ムツツリー二、秀吉から勉強を教
えてもらったから大丈夫！

雄「よう明久」

考えてる間に後ろから悪友、坂本雄二が後ろから現れた

明「雄二！テストはどうだった？」

雄「どうだろうな、翔子には勝ちたいから本気で勉強したからな」

明「僕はみんなとAクラスに入りたいたいからなーFクラスだったらどうしよう、」

雄「まあその時は俺もFまで下がってやるよ、お前が居ないとつまらないからな」

明「雄二、（；ω；）」

明「冗談だかな（笑）」

明「僕の感動を返せ!!」

西村「お前らそこで何をやっている、」

僕らに声を掛けてきたのは趣味がトライアスロンの

西村先生、又の名を鉄人だ

明「おはようございます！鉄人先生」

雄「おはよう、鉄人」

鉄「おまえらな、西村先生と呼べ！」

鉄「あと西から鉄にするな！主!!」

明「鉄人、メタいよ、」

西「ごほん！それよりほら！受け取れ」

そう言つて渡されたのは封筒だった

明「これは??」

西「その中にはお前らが通うクラスが書いてある」

雄「随分と古典的な発表の仕方だな、」

西「仕方が無い、大つぴらに発表出来ないからな、何せここはほかの学校とは違うか

らな」

確かにここは世界でも初の「試験召喚獣」と言う特別なシステムで

この学校を注目している企業は沢山あるって聞いたことがある

学校も広いし

新校舎の隣に新しい建物もある

設備がしつかりして、、

ん???

何あの豪華な建物?!

明「鉄人!あの建物はなに??」

雄「確かに他の建物と格が違うな、、」

西「ああ、あれは「SSクラス」の教室だ」

明、雄「「SSクラス?!!」」

西「ああなんでも総合点数がら7000点超えた者が4人いてなAクラスでもさががデカすぎてな、学園長が『それなら新しいクラスを作ればいいじゃないか』と行ってできたんだ」

明「なっ、、?!」

雄「7000点以上だと?!」

西「まあみんな高橋才女だと思えば早いな」

明、雄「「いやいやいや(笑)」」

あの高橋先生が4人なんて、どんな天才なんだろう
?? 「二」おはようございませす西村先生「二」

後ろから声があったので僕も雄二も振り返ってみると

明「??」

?? 「あ、あ、あきししやきゅん! / / /」

あつ、嘩んだ

明「ど、どうも!」

?? 「ご、ごめんなさい!!」

謝られちゃった

西「おはよう! 白咲、鈴原姉妹、水野達にはこれだな」

つと言つてその白咲つて人に封筒をわたし、彼女はなかから髪をとる

そこに書いてあるのは

【白咲 雪 SSクラス首席】

【鈴原 花音 SSクラス次席】

【鈴原 詩音 SSクラス】

【水野 大河 SSクラス】

と書かれていた

明、雄「、、、」

【吉井 明久 Aクラス】

【坂本 雄二 Aクラス次席】

第二話 新Aクラス！

明久視点

明「ここがAクラスか、」

雄「さすがだな、設備が教室のレベルを超えている」

確かに教室の面積は通常の教室の6倍で、教室の前面には大型スクリーンが設置されている。また生徒には個人用の冷蔵庫・エアコン・ノートパソコン・リクライニングシート・システムデスクなどが支給される。

明「これだけで今までの勉強が報われた気がするよ」

そんなことを思っていると

霧島「、、雄二、吉井おはよう」

明「霧島さん！おはよう」

雄「よう翔子、やっぱり翔子が首席だったか」

Aクラス首席、霧島翔子さんが話しかけてくれた

もう雄二とは結婚したのかな？

雄「まだしてねえ!!」

明「僕は何も言っていないよ? ってかまだかく(ニヤニヤ)」

翔「、、雄二は照れ屋さん／＼／＼」

雄「う、うるせえ!／＼」

うーん♪爆発すれば良いのにね! みんな!

康「、、おはよう」

秀「おはようなのじゃ」

姫「おはようございます!」

明「3人ともおはよぶべっ!」

3人に挨拶してた時に横から拳が飛んできた

つてことは、、

島田「おはようアキ!」

やつぱり島田さんか、苦手なんだよなー

何故かすぐ殴りかかってくるし

雄「おい島田、、いい加減明久を殴るのをやめろよ」

姫「そうですよ美波ちゃん! 明久くんだっていたいですよ!」

島「うるさいわねえ! アキは殴りやすいしこれがしつくりくるのよ」

なんて自分勝手な、汗

これだから苦手なんだよ

康「、、悪いと言う自覚がない」

秀「獣みたいだのう」

翔「、、島田さん、吉井を虐めちゃだめ」

島「なっ！アキ！あんたのせいで私が悪者みたいじゃない！」

いやいやその通りだよ

そんなことを思っていると今度はチョークスリーパーを

仕掛けてきた

明「島田さん！苦しい、、!!」

島「私は悪くないからね！分かった!!」

やばい、、！僕のおじいちゃんが見える、、

??「何やってるのですか!!!」

皆『『『?』』』』

声が出た方に振り返ってみると

白咲「貴女！今すぐ明久くんを開放しなさい！死んでしまいます！」

大量のプリントを持っているSSクラス首席

白咲雪さんが顔を真っ赤にして怒鳴っている

どうやらクラスにプリントを届けて居たのだろう
なんて優しいんだろう、

島「あんたには関係ないでしょ!このチビ!」

そう言いながら僕のことを投げながら解放する

僕、そんな軽くないんだけどなあ、ちやんとご飯も食べてるのに

白「ち、チビですつてええ!!貴女!もつとも言つてはいけない言葉をいま言いました
!」

あつ気にしてるのか、可愛いのになあ

白「もー怒りました!!高橋才女!」

そう言いながらAクラス担任、高橋才女に声を掛ける

白「私達、SSクラスはAクラスに宣戦布告します!」

えっ??

皆『『ええええええ!!』』

翔「、、ちよつと待つて!」

雄「そうだ!少し待つてくれ!今回島田の行動、言動はほんとに済まないと思つてる、
だから試召戦争はまつてくれ!」

翔「、、(コクコク)」

あの雄二があそこまで慌てている、

でも確かにいくら優秀ばかりのAクラスでも

相手は天才、生身の戦争ならともかく試験召喚獣戦争なら

話は別、圧倒的に僕達が不利だろう

白「嫌です！あの人（島田）はクラスメイトである明久くんに酷いことをしました、これはクラスの問題です！私はそんなこと許しません！」

雄「ぐう、！確かにそうだが、」

島「いいじゃない坂本！受けなさいよ」

と後ろからエンジェルフォル（島田さん）がとんでも発言をしてきた

高橋「いいのですか？その言葉は宣戦布告を受け取ると取りますよ？」

雄「島田!!いい加減にしろ！お前はこのAクラスを路頭に迷わせたいのか！まだ一日もたつてないんだぞ！」

明「そうだよ島田さん！相手はSSクラス！天才達の集まりなんだよ?!」

翔「、、まだ早い」

秀「島田よ！それは幾ら何でも早計すぎるのではないか！」

康「、、自分勝手」

Aクラス『『『そうだぞ（よ）』』』

島「あー!!五月蠅いわね」

うるさいは君だよ

島「ならこうしましよおチビちゃん、クラスとしてではなく私達個人として勝負をしましよ?かけるものは負けた人に一つ命令して、負けたものはそれに従う」

白「、、、いいでしょう、私が勝ったら明久くんは暴力を振るわないと約束してください」

島「ふん!いいわよ♪高橋先生!召喚許可を、教科は数学で」

高橋「、、、いいのですね?」

白、島「はい!」

高橋「はあ、、、いいでしょう、許可します!!」

白、島「^{サモン}召喚!!」

かくして登校1日目、SSクラス首席とAクラスベルリンの壁(島田さん)との闘いは始まった、、

第三話 初対決！白咲VS島田

雄二視点

白、島「サモン「召喚!!」」

SSクラス 白咲雪 数学 ???点

VS

Aクラス 島田美波 数学 486点

島田の召喚獣は去年と変わらず軍服にサーベル姿だ

対する白咲の召喚獣は雪模様の着物姿に扇子だ

ん???

扇子?!どう戦うんだ、? ?

まあ、見て見なきゃわからんな

にしても島田の奴、Aクラスに上がっただけあつてかなりの点数だ

島「どうよ！私は数学なら首席にも劣らないんだから！」

確かに島田の点数は翔子にも引けを取らない、

しかし相手は天才SSクラスのトップ、どういう試合になるか

いい機会だ観察し、作戦をたてられれば、

白「…そんな点数なのですか？」

SSクラス 白咲雪 数学 962点

VS

Aクラス 島田美波 数学 486点

前言撤回、作戦なんて立てても無駄だ、

つてか何だあの点数！教師でもあんな点数取れないぞ？!

島「なっ…?!何よそれ！カンニングでもしたんじゃないの?!」

白「失礼な?!カンニングなんてしてません！それに私が受けてた時、そばに居たのは

高橋先生なのですよ？カンニングなんて出来るわけじゃないじゃないですか」

確かにカンニングなんてあの高橋先生が許すわけもないし

見逃すつてのもおかしい

白「さあ！どうしますか？降参してくれば補習も受けなくて済みますよ？でも約束

は守ってもらいますけどね♪」

島「くっ！うるさいわね！いくら点数が高くて召喚獣の操作ならまけないわ！」

それも一理ある、明久のように召喚獣の操作が上手かったら

点数が高くて少しづつ削って勝てる事が出来る。

しかしお前は明久ほど操縦に長けてる訳では無い
まだ俺の方が上手く扱える

島田視点

何よ！皆して私が悪いみたいに！

私は何も悪い事して無い！アキは私に殴られるのはふつうのこと！

それに何よあのチビ、小さい癖に私より大きいなんて！

島「そのムカつく態度と大きな胸！貴女の身長みたいに小さくしてあげる！」

白「なっ……!!貴女は1度にならず2度までも私の身長をバカにしましたね!!もー許
しません！」

雄二視点

島田の召喚獣はサーベルを構え素早く白咲の召喚獣に

走りながら切りかかるが

白「甘いですよ！」

扇子を閉じ、その扇子で全ての斬撃をいなしている

雄「……おいおいマジか汗」

明「白咲さん、なんて召喚獣の扱いだ……！」

明久も驚いてるか、当たり前だ

俺もいなすことは出来るが

島田の素早く斬撃は明久もいなすことは難しいだろ

俺は無理だ

しかしあの白咲って女、なんであの攻撃を

あんな的確にいなせるんだ?!腕輪の能力か?

しかし腕輪を使った形跡はない、

島「なんで当たらないのよ!!」

白「そんな猪突猛進な攻撃、当たるはずがありません!」

確かに島田の攻撃は猪みたいに力で押す見たいなものだ

島「くっ!ならこれならどうよ!『視界妨害壁』」

SSクラス 白咲雪 数学 962点

VS

Aクラス 島田美波 数学 456点

そう叫ぶと白咲の周りに何十枚も不規則に壁ができ始めた

なるほど、隠れながら奇襲を狙うのか!

アイツの割にはいい作戦だ!しかし、、、壁か、、、

白「遂にシステムにも壁扱いですか……可哀想に（笑）」
 島「殺す!!」

白咲の煽りに反応したのか動きが更に早くなった

これは攻撃を当てるのが難しくなった

白「はあ……そろそろ終わりにしましょうか」

島「何ですって!!」

そう言うとかかを考え始めた、ちよいと白咲の近くに行くと

白「えっと……あの人が出した壁は半径5mですか……50点しか消費しないじゃないですか」

???何をするつもりだ？

白「貴女のその腕輪の能力、なんの意味もないことを証明してあげます! 『絶対零度』!!」

SSクラス 白咲雪 数学 9 1 2 点

V S

Aクラス 島田美波 数学 4 5 6 点

そう叫ぶと白咲を中心に半径5mに吹雪が起こり始めた

島「何よ（笑）ただ吹雪を起こしただけじゃないの! そんなのなんの意味もない!」

白「そんなことも無いですよ? 貴女の点数を見てください」

そう白咲が言うので島田も俺達Aクラスも点数を見ると

SSクラス 白咲雪 数学 912点

VS

Aクラス 島田美波 数学 446点

雄「嘘だろ?!」

明「えっ?!なんで?なんでなの?」

島「なんで10点減ってるの?!」

康「... 理解不能」

Aクラス『「なんでだ?」』

白「皆さんの質問にお答えしましょう!私の第一の腕輪の能力『絶対零度』は半径内
にいる敵を10秒10点削ることが出来るのです!さらに、『氷の弾丸』!」
アイスマグナム

そう言うとう白咲の召喚獣の上に5つの氷の弾丸が出来た

白「この『絶対零度』のまえではっ!」

そう言いながら弾丸を打つと

島「えっ!嘘?!なんで気づかれたの?!」

後ろから攻撃しようとした島田の召喚獣に命中する

SSクラス 白咲雪 数学 862点

V S

Aクラス 島田美波 数学 341点

白「隠れることなんて… 無駄なのです！」

雄「ハハッ、なんて能力だ」

明「まさかとは思うけどあの能力って！」

雄「ああ、固定ダメージじゃねえ、感知能力まで付いてやがる」

皆「!!!」

雄「まず間違いいねえ、何せ後ろを見ずに島田の召喚獣を攻撃した、普通ならそんな芸当鏡か後ろに目がなきゃできない。しかも感知だけじゃねえ、固定ダメージもある、ふつうの戦いなら相手が焦らないわけねえ必ず動きが直線的になる。そこであの氷の弾丸だぼぼ回避は不可能だ」

明「うん、『絶対零度』を使わなくてもあの速さの弾丸は避けるのは難しいのに『絶対零度』を使って、精神的に有利に立つことで命中率を更に100%に近付けてるんだ」

なんて性格してるんだあのSSクラス首席は、

まあ相当お怒りだからかも知れないが鬼畜すぎるぞ、

SSクラス 白咲雪 数学 862点

VS

Aクラス 島田美波 数学 331点

そうこう言ってるうちに10秒たったので

点数が引かれていく

島「何よ何よ何よ!!」

島田がどンドン焦って怒鳴っている

動きも鈍くなっている

白「自分がやっていた行いを見つめ直し、懺悔してください。貴女は明久くんを傷つけているのですよ?」

白咲が島田に最期の警告をするように問いかけるが、

島「うるさい!!!私は悪くないのよっ!!」

聞く耳を持たない島田が焦ったのか一直線に攻撃を仕掛ける

白「そうですか：：残念ですがこれまでです!!私のd)明「ハックション!!」明久くんを傷つけないで下さい!」

島「なっ：：!!」

雄「ほう、白咲も大胆だな(・▽・)ニヤニヤ」

姫「そうだったのですか(・▽・)ニヤニヤ」

明「ズビツ、、えっ？何が?？」

「どうやら明久は聞こえなかったらしい、天才的な

タイミングでくしやみをするなんて流石鈍感王だな（笑）

そんな事を言っていると白咲の召喚獣は島田に向かって

残りの4発の氷の弾丸を全て島田に打ち込んだ

SSクラス 白咲雪 数学 862点

VS

Aクラス 島田美波 数学 0点

高橋「そこまです！勝者、SSクラス白咲雪」

島「そんな…」

終わったか、、終わってみれば白咲は腕輪の能力での消費以外

無傷か。

白「約束通り、今後明久くんへの暴力は禁止してください」

島「嫌よ！私は何も悪い事なんてs…」

西「戦死者は補習だ!!島田!!」

島「いやあああー!!」

嵐のようにやってきた鉄人に島田は攫われた

明久視点

翔「… Aクラス代表として、吉井への暴力は辞めさせる」

白「ありがとうございます、そうしてもらえると幸いです」

雄「所で白咲と言ったか？」

白「はい？なんででしょうか？えつと… 坂本さん？」

雄「お前、あんなこと大声で言つて良かったのか（・▽・）ニヤニヤ??」

白「あんな、こ、と… にやああああ!!!」

ん??なんで白咲さんは顔を真っ赤にして叫んでるんだ？

明「あんなことつて??」

雄「ああ（・▽・）ニヤニヤ白咲が明久の事をs、、」

白「きやあああ!!／／にやに言おうとしゆるるのでしゆかにやかもとくん」

明「白咲さん落ち着いて！猫みたいになつてるし雄ニが中本になろうとしてるから

！

白「ううう!!／／し、失礼しました!!／／」

そう言うとうと白咲さんは消えるように教室から出ていった

慌ててる白咲さん可愛かったなー

白咲視点

白「うう：：／／」

なんであんな事大声で言ってしまったのでしょうか、

明久君は聞こえなかったらしいからまだ良かったですけど

白「はあ：：」

どうしよう（；ω；）

明久君の顔が見れないよ／／

そんなことを考えながらSSクラスに到着した

ウイーン

ちなみに教室の入口は自動ドアです

花音「あー！やつと来た！雪ちゃーんどうしたの??」

詩音「顔が真つ赤ですよ？」

水野「もしかして好きな人に告白したのか??（・▽・）ニヤニヤ」

白「ち、違います！／／あれは：：」

説明中Ⅱ三c（つ。∩。）つズザー

花、詩、水「二Aクラスの島田って人と試合をして勢い余って大声で明久くんの事を

大好きと言ったと」

白「その通りだからそんな声揃えて言わないで／／／」

水「そっかーお前の好きな人は吉井明久なのか」

花「あの子優しそうだもんねー♪」

詩「お似合いだと思うよ? (*´ω`*)」

白「うううう／＼／＼」

その後、帰る時間になるまでその話題で弄られたのは

また別のお話、

一方その頃

島「絶対に許さない!白咲雪!」

西「うるさいぞ!島田!!罰としてプリント10枚追加!!」

島「いやああああ!!!」

第四話

急展開！明久と初デート??

島田さんと白咲さんのバトルが終わり

時間は回ってもう下校時間となった

明久視点

明「あー！やつと終わったよ！そうだ雄二ー」

雄「なんだ？明久」

明「今日は家でゲームでもしてかない？最新の格闘ゲームが手に入ったんだー」

雄「おつ！そりゃいい！お邪魔させてもらうぞ」

そんな会話をしながらの下校途中

翔「…吉井、私も行っていい？」

明「霧島さん??いいけどどうしたの？」

翔「…妻は夫のそばにいるもの」

そう言っている霧島さんは誇らしげだ

雄「だーかーらー！まだ妻じゃないだろ」

翔「… 雄二は照れ屋さん、ねっしょうゆ」

と言いながらお腹をさすっている

明「まさか、もうふたりの間に」

雄「子供なんか出来るわけないだろっ!!」

翔「… この世には想像妊娠と言う言葉がある」

雄「よし!翔子、明久の家は後だ!先に病院に行くぞ」

翔「… でもまだお子さま手帳がないよ?」

雄「誰が産婦人科に行くとおもった!今から行くのは精神科だ!」

翔「… 雄二、今までののは冗談」

雄「つたく、」

そんな夫婦漫才を後ろから眺めていると

白「あっ!あきひしやきゅん!!／＼」

明「ん??やあ白咲さん♪ってか僕の名前ってそんな囁みやすいかな?」

自分では言いやすいと豪語してるけどな

白「違うんです!!ちよつと慌てると、囁みグセが／＼」

なるほど

明「なるほど、随分可愛い癖だね♪」

そう言つて優しくほほえむ

こうすれば相手もそんな落ち込まずにいられるとおもう

白「かつ！可愛い?!／／／」

白咲視点

えっ??えっ?

これは夢? 明久くんがこんな近くにいて

私のこと「可愛い」つて、、

あつ、なるほど

私、死ぬのですね

明久視点

雄「明久ーその変にしとけー白咲頭から煙出てるぞー」

明「えっ? ホントだ!! 大丈夫?! 白咲さん!」

白「ら、らいいりようぶれふ／／／」

だめだ! 言葉になつてない

もしかして熱かな?

明「ちよつとごめんね?」

そう言いながら白咲さんのおでこに自分のおでこをくつつける

ぴとゆ

白「?!?!?!」

明「熱は無さそうかな、って白咲さん?!」

白咲視点

あー空から天使がー

明久くんの顔がスグ目の前に、、／／／

今日が命日でも私は幸せですー

明久視点

どうしよう、なんかわからないけど

白咲さんの様子がおかしい、やっぱ具合悪いのかな?

明「ごめん雄二!なんか白咲さん心配だから白咲さんの家まで送ってくからゲームは

また今度にしてくれない?」

雄「あ、ああ」

雄二視点

明久はほんとに馬鹿なのか?

いや、それは愚問だった、馬鹿だからあんな事が出来るし

自覚も何も無い

とんだフラグ建築家だな

明久視点

結局ゲームはまた今度にしてもらって

今は白咲さんを家まで送っている最中だ

なぜだか白咲さんは僕の方をみてぼけーっとしているが

明「あの一、白咲さん??」

白「ぼー／／∴はっ!!私是一体!って明久くん?!／／なんでここに?!」

明「いや汗、白咲さんがぼけっとしてたし心配だから家まで送ろうと」

白「∴はい??」

白咲視点

今なんて??

心配?お家まで送ってくれる??

∴ほんとに夢ではないのかな?

夢なら覚めてほしい∴いや、覚めて欲しくない／／

そうだ!ほっぺをつねれば分かるはず!

明久視点

白咲さんは少し止まると

いきなり自分のほっぺをつねり始めた

明「なにやってるの?!」

白「…痛い、って事は夢じゃない?!現実!!／／／」

明「…、ぷっ!ははは(笑)」

白「明久くん??」

明「いや(笑)ごめんごめん(笑)あまりに白咲さんが可愛かったからつい(笑)」

白「また可愛いとっ?!／／／」

明「ほら♪あまり遊んでると遅くなるから、早く帰ろうよ(笑)」

そう言うと

白「むう!遊んでなんかいませんよっ!」

ほっぺたを膨らませて怒っている

何この可愛い生き物

こんな可愛い姿、もっと思いたいな…、そうだ!

明「白咲さん!」

白「ぷー…、ん??なんですか??」

明「明日から一緒に帰らない?雄二達もいる時もあるし僕だけの時もあるけどそれでもいいならだけど、もちろん嫌なら大丈夫だけど、どうかな?」

白「えっ?!／／いいのですか?!」

明「むしろこっちがお願いしてるんだよ? (笑)」

白「わ、私で良かったら喜んで!!／／」

笑顔で了解してくれた、良かった!

明「あっ! そうだ! 今度白咲さんのクラスメイトも紹介してよ! 是非友達になりたいし!」

白「もちろん♪その代わりですけど明久くんのクラスメイトも紹介してください!」

明「OK♪」

こうして帰り道を2人で話しながら帰った

時間は進み夜

白咲家

白「~~~~~!!!／／」

私は自分の部屋で暴れていた

もちろん声は抑えました

まさか明久くんの方からお誘いが来るとは…

白「はあ… 幸せ／／」

もしかして明久くんは私に気があったり、

白「きやあああ!!／／／(バタバタ)」

私の馬鹿!自惚れちゃだめだめ!

白「…明日楽しみだな／／／」

髪の毛とか気をつけないと!服装も綺麗に…

こうして少女の葛藤は深夜まで続いた、

明久家

明「明日はみんなに白咲さんの事紹介しよう!きっと雄二達も大歓迎だろう!」
相変わらず恋心には鈍感な明久だった、

—————

主「あれ?これってデートじゃn…花音「ストローップ」ぐへっ!」

花「メタいの禁止!!」

第五話

AクラスVSSSクラス

エキシビジョン

マツチ!!

明久視点

白咲さんと帰るよう約束してから次の日の教室にて

島「なんで了解してくれないの！坂本！」

雄「ああー！うるさいな、昨日で懲りただろお前じゃ一生白咲には勝てない、大人しく諦めろ」

島「そんなのやって見なきゃ分からないじゃない！」

島田さんと雄二が言い争ってる

明「雄二、どうしたの?？」

雄「ああ、明久か。コイツSSクラスに試召戦争をしたいとほざいてるんだよ」

明「SSクラスに？島田さん、昨日痛いほどわかったでしょ？白咲さんの能力、召喚獣の扱いの上手さ、どれもこれも島田さんよりも上だよ？」

島「アキは黙って!!」

バシツ!!

明「ふべっ！」

優しく諭したつもりが殴られた

雄「おい島田!!お前昨日の今日で忘れたのか!白咲との勝負で何を約束した!」

島「あんなの関係ない!これはウチとアキの問題なの!周りに指図される筋合いはないの!!」

雄二視点

コイツツ、、!!!

女じゃ無かったらポコポコにしてやるのに!!

、、仕方がない

雄「わかった、お前の願い叶えてやる、ただしだ!あくまでエキシビジョンマッチ。召喚獣の操作の練習と言う名目でやる、まあ個人で何かをかけるのは自由だがな」

島「ふん!ならそれでいいわよ」

コイツいつからこんなクズになったんだ??

島田が満足したようで自分の席に戻って行った

雄「明久大丈夫か?」

明久「まあ何とか大丈夫だよ、イテテ、、」

明久の頬は少し腫れてる

雄「ムツツリーニ」

康「…、なんだ？」

雄「さつき、島田が約束を破った時の写真は撮れたか？」

康「…、一応撮っておいた、現像はスグ出来る」

雄「分かった、スグ頼む」

康「…、わかった」

そう言う姿を消す、康太はほんとに忍者じゃないのかなと錯覚する時がある
あと、

雄「すまねえ、翔子試召戦争仕掛けても大丈夫か？」

翔「…、私は雄二について行く」

雄「ありがとうな（ナデナデ）」

今回に関しては翔子達に迷惑かけちまう

たまには甘えさせてもいいか

翔「…、あ、ありがとう／＼／＼」

その後主力メンバー＋ぬりかべを揃えて話をする

雄「いいか？相手はSSクラス、4人しか居ないが全員教師と同じ、いや教師以上の
実力を持つてる！勝負は一騎打ちに使用とするがAクラスのハンデとして1人なら2

人、2人なら4人と、倍の人数で戦わしてもらおう」

優 「そんな無理なお願ひ聞いてもらえるのかしら?」

雄 「そこは問題ないと思う交渉には俺と翔子で行ってくる」

翔 「… 任せて」

雄 「それと敵の情報を調べてその情報から、まず二対四の対決だ、相手は恐らく鈴

原花音、鈴原詩音ペアだと思う、ここには秀吉、優子、俺、翔子が行く」

秀 「了解じゃ」

優 「流石に4人いるなら負けられないわね」

翔 「… わかった」

明 「いきなりAクラスの首席、次席が出ていいの??」

雄 「仕方ない、何せ相手が相手だから初めから全力で行かないと行けない、次に「水

原大河」と言う男だが、ムッツリーニ、工藤愛子の2人に相手してもらいたい」

康 「、、 了解」

愛 「了解♪」

雄 「ただ油断はするな!ムッツリーニは調べたから知っているだろうが相手は保健体

育だけでS Sクラスに入れるぐらいの点数を稼いだ天才だ」

明 「嘘?!ムッツリーニより点数取れる人が居るなんて、、」

康「…、悔しいが事実」

明「最後に首席、白咲雪だが…、明久と姫…、島「私が出るわ、」っておい!!」

島「何よ？文句あるの？アイツは私が倒すの！それにアキよりは私の方が点数は高いし1度アイツと戦った、もう戦法は見え見えだわ」

明「雄二、白咲さんには悪いけど僕の方から1対3としてお願いしてみるよ、それが無理なら僕が島田さんと変わるから」

雄「まあそこは頼み込むとしよう…、（まあアイツの約束を破った写真を使えば大丈夫か？）」

島「今度こそ倒してやるわ…。」

雄「姫路も頼んだぞ？相手は首席だ。」

姫「分かりました！」

明「頑張ろうね！姫路さん」

姫「はい！♪」

そんなこんなでSSクラスにて

雄「失礼するぞ」

明「失礼します」

白「あら？明久くんと坂本さん、それに翔子ちゃん！どうしました??」

雄 「いきなりすまん、俺たちAクラスはSSクラスに試召戦争を申し込む。対決方法は二対四、一体二、一対三の変則マッチで頼む」

花 「あらら？ほんとに随分変則的だね」

詩 「それに一対三とは？」

水 「昨日そっちのクラスと首席が戦ってこっちが勝つたのだが、昨日の今日でどうした？」

雄 「実はその惨敗した本人が再戦したいとうるさくてな、、」

白 「そうなのですか汗、大変ですね、私達は何時でも大丈夫ですよ」

雄 「すまねえ、今日の放課後で大丈夫か？」

白 「はい♪お互い、いい試合をしましょう」

こうしてAクラスとSSクラスの対決が始まる、、

第六話 秀才VS天才

Aクラス教室

雄二視点

高「それではAクラス対SSクラス、第1回戦。SSクラス鈴原花音、詩音ペア。Aクラス木下優子、秀吉、坂本雄二、霧島翔子。前へ！」

花「やつほく☆Aクラスの皆さん初めまして！私がSSクラス次席の鈴原花音です！」

詩「SSクラス、鈴原詩音です。よろしくお願ひします（ペコ）」

雄「Aクラス次席の坂本雄二だ、よろしく頼む」

翔「… Aクラス首席の霧島翔子、坂本雄二の妻です」

雄「おい！だからだれg. 優「Aクラスの木下優子です。よろしくね、SSクラスの皆様さん」

秀「Aクラスの木下秀吉じゃ、こう見えても僕は男なのでよろしく頼むのじゃ」
遮られただと?!

花「へー！もう結婚してるの？若いのは早いねー♪」

詩「お姉ちゃん？坂本さんはまだ結婚出来る年じゃないよ？」

高「教科は何にしますか？」

雄「教科は古典でお願いします」

高「古典ですね？承認します」

花、詩「^{サモン}「召喚!!」」

雄、翔、優、秀「^{サモン}「「召喚!!」」」

坂本雄二 古典 415点

霧島翔子 古典 459点 V 鈴原花音 古典 623点

木下優子 古典 398点 S 鈴原詩音 古典 622点

木下秀吉 古典 471点

秀吉の得意分野にしたが、さすがSSクラス、、点数が教師クラスとは

秀「今回は自信あったのだがのお、、」

召喚獣の姿は

俺が改造制服にメリケンサック

秀吉が新撰組の羽織に刀

翔子が武者鎧に日本刀

木下姉が西洋鎧にランス

対する向こうの召喚獣が

鈴原花音は巫女装束に薙刀

鈴原詩音がナース服にメスと注射か、、

またイマイチ能力が分からんのがあるな汗

花「それじゃあ行きますか！『桜吹雪』！」

坂本雄二 古典 4 1 5 点

霧島翔子 古典 4 5 9 点 V 鈴原花音 古典 6 1 3 点

木下優子 古典 3 9 8 点 S 鈴原詩音 古典 6 2 2 点

木下秀吉 古典 4 7 1 点

そう叫ぶとみんなの周りに桜が舞い始め、かなり視界がわるくなった

人間からしたらそうでもないが召喚獣が見えづらい汗

しかしそしたら相手も同じなんじゃ、、あれは?!

雄「翔子！危ない！」

翔「?!」

慌てて翔子の召喚獣の後ろに目掛けてストレートを打つと、、

キイイン

メリケンサックと薙刀がぶつかる音がした

雄「危なっ!!」

秀「ナイスじゃ雄二よ!」

優「大丈夫?!代表」

翔「… うん平気」

花「ありや? 決まらなかつたか汗」

詩「お姉ちゃんが決め損なうなんて珍しいね」

まさかこの桜も感知するタイプなのか?!

花「坂本くんが心配してるものでは無いよ? 何せこの技単なる目くらましだもん、今のは桜を踏んだ音を頼りに霧島さんの後ろに近づいたただけだもん♪」

コイツ、武道の心得があるのか? 明らか動きが素人では無かつたが、

花「でもこの方法を見破る坂本くんの野生の勘は凄いよ! もしかして坂本くんもなんか武道を?」

雄「俺は何もしてないさ、ただちよつと若い時にやんちゃをな」

秀「とりあえずみんな固まつて行動すれば安易に後ろは取れなくなるのじゃ」

秀吉、木下姉、翔子が俺の近くに来た

花「ふふふっ♪なら私も久々本気出しちゃおっかなー♪詩音くいつもの宜しく!」

詩「分かつたよお姉ちゃん『ドール身体強化』!」

そう言うのと詩音の召喚獣が花音の召喚獣に注射をした
その数秒後、

花「ダメだよ！皆よそ見しちゃ♪」

坂本雄二 古典 348点

霧島翔子 古典 357点 V

鈴原花音 古典

613点

木下優子 古典 314点 S

鈴原詩音 古典

572点

木下秀吉 古典 393点

4人の点数が50点数以上減っていた

雄、翔、優、秀 「「「?!」」」

詩「私の第一の能力『^{ドローピング}身体強化』は私が50点消費する変わりに、自分か味方、どち

らか1人の攻撃力と速度を2倍にする事が出来るの。但し同じ人にもう1度使おうと

すると次は100点消費と使う事に消費も激しくなるの」

花「元々点数的に動く速度も速いし、攻撃力も高いから掠っただけでも痛いからね」

♪

いやいや、幾ら何でも早すぎだ、、どうする、、！

秀「任せるのじゃ！『演技』」

坂本雄二 古典 348点

霧島翔子 古典 357点 V 鈴原花音 古典 613点

木下優子 古典 314点 S 鈴原詩音 古典 572点

木下秀吉 古典 333点

秀吉の能力、『演技』は10点消費すると

相手、味方の能力を一つ使えることが出来る、その時同じ点数を失うが、これなら対抗出来るか、！

秀「鈴原花音は儂が食い止める！3人でもう一人を頼むぞ！」

雄「分かった！行くぞ！」

優、翔「分かった（わ）」

花「君すごいね！詩音の能力使えるなんて、こりや面白いぞー！詩音！何とか踏みとどまってるね！すぐに加勢にいくから」

詩「分かった！」

鈴原花音と秀吉の召喚獣が戦っているが

やはり点数が点数だ、秀吉が押されている、早く3人でもう一人を倒さないと行けない

詩「3対1は厳しいかな、でも負けません！『レントゲン』、『^{ドーピング}身体強化』」

坂本雄二 古典 348点

霧島翔子 古典 3 5 7 点 V 鈴原花音 古典 5 9 7 点

木下優子 古典 3 1 4 点 S 鈴原詩音 古典 5 0 2 点

木下秀吉 古典 2 6 7 点

今度は自分に使ったか、それとレントゲンとは??

優「先手必勝よ!」

翔「… 同感!」

木下姉と翔子の召喚獣が攻撃を仕掛けるが

詩「甘いです!」

スツスツ

つと躲され

坂本雄二 古典 3 4 8 点

霧島翔子 古典 2 4 7 点 V 鈴原花音 古典 5 9 7 点

木下優子 古典 2 0 3 点 S 鈴原詩音 古典 5 0 2 点

木下秀吉 古典 2 4 4 点

メスで攻撃された

雄「まさかお前まで武道を?!」

詩「いえ、私はやってませんよ?強いていうなら『レントゲン』は相手の召喚獣がレ

ントゲンみたいに見え、骨、筋肉等の動きから次の動作を先読み出来るようになったのです」

おいおい汗

感知の次は予測かよ、相変わらずチートな能力の集まりだな

詩「私を倒してからと甘い考えは捨てた方が良いですよ？」

雄「ああそうさせてもらおう！翔子！木下姉！相手が予測できるのなら逆に予測する余裕を無くすぐらい攻め続けるぞ!!」

翔「…分かった」

優「分かったわ！」

詩「お姉ちゃんに負担は掛けさせたくないから、全力で守ります！」

こうして熱い攻防がはじまって数分後

坂本雄二 古典 79点

霧島翔子 古典64点 V 鈴原花音 古典 516点

木下優子 古典 0点 S 鈴原詩音 古典 172点

木下秀吉 古典 0点

詩「まさかここまで削られるとは、」

雄「こつちのセリフだ、1人に対してここまで戦力削られるとは思わなかったぞ、」

秀吉、木下姉はやられちゃった、

花「そろそろ決着を付けるよー！坂本くんには特別に見せてあげる、、『枝切り』」

坂本雄二 古典 79点

霧島翔子 古典 64点 V 鈴原花音 古典 416点

木下優子 古典 0点 S 鈴原詩音 古典 172点

木下秀吉 古典 0点

100点も消費しただと?! 一体どんな技を、

花「坂本くん♪後ろだよ」

ザンツ

坂本雄二 古典 0点

霧島翔子 古典 64点 V 鈴原花音 古典 416点

木下優子 古典 0点 S 鈴原詩音 古典 172点

木下秀吉 古典 0点

いつの間に後ろに居たのか?!

それが能力か、クソっ!

その後翔子もやられ、

高「勝者!SSクラス鈴原花音、詩音ペア!!」

花「やったね詩音♪」

詩「うん！」

雄「明久、それにみんな、すまねえ！」

明「気にしないで！それにあの点差であのSSクラスをあそこまで追い詰めたんだよ？良くやったって」

康「、、、気にするな」

姫「皆さん凄いいい試合でしたよ？♪」

愛「そーそー！それにエキシビジョンなんだから大丈夫だよ」

他の皆も励ましたり、褒めたりしてくれたが、、、

島「なんで負けるのよ！もつと頑張りなさいよ」

この壁だけはご立腹のようだ

第七話 忍&セーラ少女VS『死神』

雄二視点

くそ、、、やっぱりどいつもこいつも化物みてーに強い。

翔「雄二・・・ごめん」

秀「本当にすまぬのお」

優「ごめんなさいね、坂本くん」

雄「いや、気にするな！あくまでこれはエキシビジョンだ、何も全てをにかけてる訳では無い、、、まあ勝ちたかったがしょうがないさ」

次の相手はさっきの2人よりも化物だぞ、、、頼んだぞムツツリーニ、工藤！

高「次の試合を行います！SSクラス水野大河、Aクラス土屋康太、工藤愛子！前へ

！」

水「おっし、やるか！」

康「、、、勝ちに行くぞ工藤愛子」

愛「はいよムツツリーニくん♪」

高「教科は何にしますか？」

康「、、保健体育」

水「いいのか？よりによって保健体育で??」

花「水野君に対して保健体育とは、、凄いな」

雪「確かに：：うちのクラスでも誰も勝てないのに、、」

高「保健体育ですね、、承認します!!」

水、康、愛「二召喚^{サモン}!!」

保健体育

Aクラス 土屋康太 1691点

Aクラス 工藤愛子 1178点

VS

SSクラス水野大河 6127点

ムツツリーニの情報通り、、化物だな、、

水「驚いた、、まさかお前らもそんな点数が取れるなんて」

康「、、努力すれば道は開く」

愛「2人でいっぱい教えあつたもんね」

康「、、!!(ボタボタ」

水「おい大丈夫か?!凄いな出血だぞ?!」

康「、、これは立ちくらみ、、」

人は立ちくらみで鼻血が出るのか、、

雪「水野君は相変わらずすごい点数だけどあの2人も凄いね！」

花「うん！保健体育だけだったら勝てないよ汗」

ムツツリーニの召喚獣は忍衣装に小刀

工藤の召喚獣はセーラ服に斧

水野大河の召喚獣は白衣+棺桶に銃か、、

なんで棺桶何だ??

康「、、先手必勝『加速』」

保健体育

Aクラス 土屋康太 1681点

Aクラス 工藤愛子 1178点

V S

SSクラス水野大河 6014点

水「おっと！いきなり攻撃か、しかも腕輪の能力が『加速』、点数消費も小さい割にはかなり厄介な能力だ、、お前、面白いな♪」

愛「私も忘れちゃ困るよ！『放電』！」

保健体育

Aクラス 土屋康太 1681点

Aクラス 工藤愛子 1128点

VS

SSクラス水野大河 5875点

今度は工藤の電気を纏った斧が水野の召喚獣を攻撃する

斧自体は避けたが纏っていた電気がいいダメージを与えている

水「なかなかいいコンビじゃないか！これは燃えてきたぞ！『追尾弾』！」

保健体育

Aクラス 土屋康太 1681点

Aクラス 工藤愛子 1128点

VS

SSクラス水野大河 5775点

そうやって水野の召喚獣は二発の弾丸を放つ

水「その弾は避けられない！何かに当たらない限り追い続ける、さあ！どうする?!」

康「、、厄介だが、、こうする」

ムツツリーニの召喚獣は器用にその弾丸を小刀で防いだ

愛「そんな弾、喰らわないよ！」

工藤は電気を纏った斧でガードした

水「おお、まさかああも簡単に防がれるとは汗」

花「水野君ダサイーwwww」

水「うるさいぞ花音！（；；；；）」

康「、、畳み掛ける、行くぞ愛子」

愛「オツケーだよ♪」

水「つと！余所見してる場合じゃないが、、そろそろ決めさせてもらおうぞ！」

水野の召喚獣が構えた

康「、、これで決める『加速ギア2』」

愛「私だつて！『雷神』！」

保健体育

Aクラス 土屋康太 1581点

Aクラス 工藤愛子 1028点

V S

S Sクラス 水野大河 5775点

2人とも100点消費の能力か、、どうだ？

ムッツリーニの召喚獣はさっきの4倍速く、攻撃の威力も倍になっている

工藤は速度が2倍、攻撃の威力が4倍に跳ね上がった

水「これは凄いな、汗」

保健体育

Aクラス 土屋康太 1581点

Aクラス 工藤愛子 1028点

VS

SSクラス水野大河 3415点

雪「あの水野君がここまで削られるなんて初めて見ました、」

詩「…あの2人のポテンシャルはかなり高いですね、特に土屋さんは召喚獣の扱い

は水野君以上、召喚獣の長所もしっかりと理解してるから手ごわいです」

花「、でも、水野君には『アレ』がある」

雄「行け！ムッツリーニ、工藤！」

明「あと一息だよ！」

姫「頑張つて下さい！」

島「ふんっ！まあやるじゃない」

ムッツリーニと工藤の召喚獣が水野の召喚獣を挟み撃ちにした

水「、、、正直ここまでやるとは思わなかった！土屋康太！工藤愛子！お前らの強さは俺が保証する！だから特別にこの技で仕留めてやる！！」

水「『死神の鎮魂歌』、、、」

康太視点

、、、何だ、、、？

召喚獣が動かない、、、

水「ほう、、、この技の中で意識があるのかお前の加速のギア2は相手の動きが遅く見えるほど早くなれるのか、、、強いわけだ」

隣を見てみると工藤愛子が止まっている

そして周りを見ると全てが止まっている

康「、、、この技は時を止めるのか、、、?!」

水「いや、少し違う。時間を止めてるんじゃないやなく、俺が超加速したのさ

それこそ他のやつが止まって見えるほどにな」

康「、、、なんだと?!」

水「お前のギア2も似たようなものだろ？あれも加速技だ。お前が俺と話せてるのはびつくりしたよ、なんせ俺の能力の何歩か前まで来てる証拠だ」

正直、このギア2を習得した時、

俺は保健体育では誰にも負けない自信があつた、

しかし俺の目の前には俺より点数も、能力も上のやつが居た

、、悔しくてしょうがない

水「まあそう悲観的になるな、お前とはいいライバルになる、俺はそう感じた。だからこの技を使った、いや、使わざる負えない状況までお前が持ってきたんだ」

康「、、?!」

水「だから誇れ、そしてもっと努力しろ！お前が努力する分、俺も努力するからな、だから俺に負けないぐらい努力しろ！」

そう言うと

水野の召喚獣は俺と愛子の召喚獣に銃を発射した

そして能力が解除された（その間四秒）

保健体育

Aクラス 土屋康太 0点

Aクラス 工藤愛子 0点

VS

SSクラス水野大河 1155点

雄二視点

な、何が起こったんだ、

一瞬水野の召喚獣が動いたと思ったら

2人の召喚獣が倒されてた

そしてあの点数よ減り方はなんだ?!

能力の代償か?!

明「えっ?!今いつ攻撃したの?!」

愛「えっ!!嘘?!」

康「、、くそっ!」

水「お前らほんとに強かった!ありがとうな」

高「勝者、、SSクラス水野大河!!」

こうして2回戦目もSSクラスの勝利だった、、

島「、、ちっ、使えないわね」

誰も聞かれないくらいの声で島田が呟いた

康「、、雄二、明久、そしてみんな、、済まない」

愛「あははく汗ごめんね、、みんな」

雄「気にするな!それに今は楽しむ時だぞ?」

翔「・・・そう、お互いいい刺激になる」

明「そうだよ！ムッツリーニだっといういいライバルに出会ったんじゃない？」

康「…、ああ、あいつはいつか俺が倒す」

SSクラス側

水「いやー危なかった！」

雪「あの2人ほんとに強かったですね！」

花「ほんと！私達だつたら勝てなかつたよ！」

詩「…、たしかに、私とお姉ちゃんのペアでやっても、保健体育なら勝てなかつた」

水「これからが楽しみだよ！」

高「それでは最終試合を始めます！両者前へ！」

高橋才女の掛け声で、運命の最終試合が始まろうとしていた、…、